

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ヤングケアラー^{〔注〕}たちは2つの理不尽さに直面している。ひとつは家族のケアを担う以外の道がないという理不尽さであり、もうひとつはどれほど頑張ってもそのケア経験が評価されないという理不尽さである。

何度も繰り返すが、家族のケアをすること自体は悪いことではない。しかし、それが過度な負担になると紛れもなく子どもの人権にかかわる問題になる。またそれほど大きな負担になっていない場合でも、彼らをサポートすることが必要である。

しかし、現在のヤングケアラーたちは何の理解もサポートも得られないなかで、たとえケアの負担が大きくなったとしても、ケア役割から離れたいと思っただとしても、ケアを担う以外の選択肢がない状況に置かれている。自分の生活や健康を犠牲にしてもケアを担う以外に道はない。そしてケアを担うことによって生じた不利は、その子どもが背負い続けなければならない。

この理不尽さを押し付けているのは親ではない。これまで紹介してきたヤングケアラーの家庭を振り返ってみても、親も仕事とケアの両立でぎりぎりの状態である。または親自身が障がいや病気を有し、ケアを要する状態である。いずれも親が苦しい状況に置かれており、子どもがそれを助けるという構造になっている。

家族介護に一定の役割を期待し、それにもかかわらず家族介護者への十分なサポートがない現行の社会保障・社会福祉制度のもとでは、子どもがケアを担う以外に道はない。これは社会によって押し付けられた理不尽さである。

このような社会的支援が十分にないなかでも、ヤングケアラーたちは、一生懸命、学校に通いながら、ケアを担っている。しかし、彼らのその頑張りやそこで身に付けたものは理解も評価もされないことが多い。彼らのケア経験はあたかも「ゼロ」であるかのように扱われる。

これがふたつめの理不尽さである。このゼロ評価（場合によってはマイナス評価）によって、学校・大学で孤立する、学び続けることを諦めざるを得ない、就職活動がうまくいかないということが生じる。

これはヤングケアラーたちの社会的地位が認められない、社会の一員として生きることが妨げられているという理不尽さであるとも言える。そしてこれも当然、社会の無理解によって押し付けられた理不尽さである。

（注1） ヤングケアラー

「何らかの疾患、障がい有する、高齢である、または幼い家族・親族がいて、そのためにケア（家事、介護、感情的サポート、通訳等）を担っている子ども・若者」

（濱島淑恵 『「子ども介護者」 ヤングケアラーの現実と社会の壁』）

※設問のために一部改変

問い一 本文を二〇〇字程度で要約しなさい。

問い二 本文で語られている「家族介護に一定の役割を期待し、それにもかかわらず家族介護者への十分なサポートがない現行の社会保障・社会福祉制度のもとでは、子どもがケアを担う以外に道はない。」とありますが、ヤングケアラー問題に対して、あなたはどうか社会制度を改善するか、または新たな支援策や解決策を二〇〇字程度にまとめて述べなさい。